

令和4年度 第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 議事録

(1) 会次第等

令和4年度 第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 会次第

日時：2022年11月29日（火） 10：00～12：00

場所：沖縄県市町村自治会館 2階大会議室

1. 開会・あいさつ
2. 第2回会議の振り返り 【資料1】
3. 報告 【資料2、資料3】
 - (1) ヒアリング調査結果
 - (2) 検討会
4. 議論 【資料4、資料5】
 - (1) 議題：提言書骨子（案）について 【資料4、資料5】
 - (2) 提言書のとりまとめに向けた考え方（案）について 【資料4】
5. 閉会・事務連絡

(2) 出席者

■委員

氏名	分野	職名等	出欠
波照間 永吉	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	○
山里 勝己	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	○
大田 静男	歴史	八重山歴史・芸能研究家	○
上里 隆史	歴史	琉球歴史研究家	○
いのうえ ちず	文化	雑誌「モト」編集長	○
富田 めぐみ	伝統芸能	合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家	欠席
嘉数 道彦	伝統芸能	沖縄県立芸術大学 音楽学部 琉球芸能専攻 准教授	○
小渡 晋治	伝統工芸	(株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長	○
久万田 晋	民族音楽/民俗芸能	沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授	○
知念 賢祐	空手	沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長	欠席

(3) 議事録詳細版

1. 開会・あいさつ

【事務局】

委員の皆様こんにちは。まず、本日の資料の確認を行います。

資料の確認（省略）

本日の出席状況についてご報告いたします。本日は、10名中8名の委員にご参加いただいております。知念賢祐委員、富田めぐみ委員は欠席となっております。

また、県の関係課として、文化振興課、ものづくり振興課が同席しています。

それでは、これより令和4年度第3回琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議を開催いたします。

早速、議事に移りたいと思いますので、波照間委員長、よろしくお願いいたします。

【波照間委員長】

皆様おはようございます。今回は、前回会議の振り返りを行った後、前回報告でできなかった分のヒアリング結果と10月から11月にかけて行った検討会の内容について事務局から説明していただく予定です。

それから、本日のメインの議題は、県知事への「提言書（骨子案）」について議論していただくことが一番重要な課題となっております。委員の皆様にも、改めて活発な議論をお願いしたいと思います。

それでは次第に従って、会議を進めていきたいと思います。どうぞご協力よろしくお願いいたします。

まず、第2回会議の振り返りということで、事務局より資料説明をお願いします。

2. 第2回会議の振り返りについて

【事務局】

資料1 説明（省略）

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。只今の説明について委員の皆様から抜けている点、あるいは疑問な点などございましたらお出しいただけますか。なければ第2回会議で話し合っていた事に基づいて今後の議論は行われていくという事になりますが、これでよろしいですか。（一同、同意）

どうもありがとうございました。ないので、次の報告に移りたいと思います。

ヒアリング調査の結果について、ここで報告していただいているものが2件ほどありますので事務局からご報告いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

3. 報告

【事務局】

資料2 説明（省略）

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。只今の説明内容等について、皆様から質問やご意見ございませんか。

それでは、私から一つお聞きして次に繋げたいと思います。

与那国島はクバをよく使い、もちろん食材にも使う、クバとの生活の関わりが深い地域です。與那覇さんは若い年齢ながら子どもの頃から老人達とよく付き合っていて、クバを使った民具の製作に、生業、生活の主要部分として取り組んでおられるという事で、與那覇さんの事はよく分かりましたけれども、沖縄県内で與那覇さんの活動に類する若い人、あるいは若くなくてもいいんですけども、民具を作って、それを地域の文化の交流、あるいは生業として、取り組んでいるような地域事例がありますでしょうか。

いのうえ委員、どうぞ。

【いのうえ委員】

県外出身の元スタイリストで、今は伊平屋島に住んでいる方ですが、民具を現代風に感覚でアレンジをして、それを色んなところに出している方がいます。ただ、文化の本質的なところを発信しているかという点、ちょっと違うかなと思います。でも、島の文化を非常にリスペクトされていて、現代的な形にアレンジすることで県外にも広く発信できるという、アレンジ型の民具製作者はいらっしゃいます。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。こういった事をお聞きしましたのは、各地域には地域を代表する様々な民具があったはずですよ。例えば、瀬底島の「むんじゅる（麦わらの笠）」などは、琉球芸能で非常に重要な小道具の一つですが、製作者がほぼ途絶えかけているわけで、記録映画が作られています。そういった、非常に重要な産業というか、手仕事なくなっていく現実があるわけです。また、本来、仏像彫刻師だった方が、獅子頭の製作をするようになって、それを記録した映画が、記録映画の優秀賞をもらったという事例もあります。その他、八重山地域で有名な新城弘志さんのように、獅子頭や弥勒面の製作をとおして、いわゆる伝統工芸の一つ、そして地域の文化、まさに精神文化の振興を支えるものとして、そのような産業に深く携わっている事例がある。ただ、いずれも高齢となっています。そういった事を與那覇有羽さんのヒアリングと繋げて、「與那覇有羽さんがこう言っている」だけで終わらせてはいけないと私は思います。沖縄全体でいわゆる伝統工芸の漆芸や焼き物、織物などはちょっと違う民具、民俗文化に関わるものの生産技術の伝承であるとか、あるいは生活の生業と

して成り立つようにしてあげられるかどうかとか、そういった問題をここで一度、考えておいていいのではないかと思いますので、あえて発言させていただきました。

ほかにご意見ございますか。

【小渡委員】

民具技術と同じ文脈で、金細工の又吉さんは、後継者育成が難しいという事で、自分が作品を作るときの音や、製作工程をすべて記録に残しているとお聞きしたことがあります。

後継者育成に関してはすごく難しい問題だと思っております。先ほど事例で出された「むんじゅる笠」を継承するのであれば、生活は保障されるという話にもならないと思います。

これをどういうふうに残していくかっていうのは、色んなアプローチがあると思いますが、やっぱり、いつか誰かがちゃんと復活させたいと思った時に復活させられるような形の記録保存というものも、あまり積極的に取りたいアプローチではないですが、最低限やっていかないと本当に消滅してしまうという危機感があります。又吉さんの事例はすごく良い事例になるのではないかと感じています。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。

それでは大田さん、どうぞよろしく願いいたします。

【大田委員】

與那覇さんはクバ以外にもアダンの葉を使って色んな民具を作っています。

関連して、北九州大学が主催する「アダンサミット」では、北は奄美から南は与那国まで、多くの人に参加して行われます。一昨年頃に石垣で開催した時は約 600 名の人達が参加しまして、小学生から幼稚園生、保育園児

もいました。しかし現在、アダンは全然活用されていません。料理では新芽の一部分を活用したぐらいで、昔はゴザとか色んなものに使用されてきたわけですが、今はほとんどされていない。サミットでは、與那覇さんが大きいアダンの幹を切ってきて、水を汲むものを作ったりという技を見せてくれたりはしましたが。

石垣市立八重山博物館では、子ども博物館というのがありまして、そこではアダンの代わりにテープを組み合わせた馬や亀のようなおもちゃを作ったりしています。当日は沖縄本島からもアダン葉帽子を作る専門家を招いて、講演していただいたりします。アダンに対する関心は大変高いのですが、アダンの葉に棘があるので、なかなかとっつきにくいというのが、若い女性達の話でした。それから、宮古島からは、アダンの実の料理というのが作られて大変好評でした。バヌアツのフツナというところの方が来て、ヤシの葉やアダンから、あつという間に色んなものを作っていました。それを見ていると、石垣、沖縄の資源というものは沢山あるんじゃないかなと思いました。カヤで作られた穀物入れなど、生活に根差してやってきたものも沢山ありますが、そういうのを作る年寄りが高齢化して、どんどん辞めていっています。これはどうにかしないといけないと思いますが、やはり生活の問題が必ず出てきます。それをどう解決していくかというのが、これからの大きな課題ではないかなと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。與那覇さんの提言に関連して、私を含めて三名から意見が出ましたが、今話されたことは、それこそ家でお父さん、おじいさん達がずっとやってたような仕事なんですよ。それが専門的な職業として成り立つかどうかは、非常に大

きな問題ではありますが、今後、このような技術無くさせるわけにはいかない。民俗学など学問的な面からも重要です。そして、技という琉球文化を伝承するという観点からも非常に重要です。そういう意味で、技術を持つ人がまだいらっしゃる今なら、伝承がまだ間に合うかもしれない。小渡委員からは、仮に現在活躍している方々がいなくなっても、いつか誰かが再興するための記録づくりだけはしていかなきゃいけない、という意見がありました。少なくともそういった取り組みを、組織として行う必要があります。

それは例えば博物館の仕事じゃないかと思われるかもしれませんが、万国津梁会議において琉球文化全体という大きな視点でみると、このことは博物館だけの仕事ではありません。そして、生業化、生産と関わってくるということになってくると、やはり県としてどのような形で援助・取組ができるか、ということを含めて議論しなくてはいけないと思います。與那覇さんや八巻さんのご意見も含めて、本質的な価値の理解という問題と今出てきたことは関わっていると思いますので、與那覇さんの発言に関して、一つ付け加えておくべきだろうと思いましたので申し上げました。よろしく願いいたします。

【久万田委員】

シカゴ県人会副会長のお話の中で、創作エイサーと伝統エイサーに関して発言されました。気をつけなくてはいけないのは、伝統エイサーと創作エイサーを固定的に捉えすぎると、色んな誤解が生じてしまうということです。エイサーはこの100年間で非常に大きく姿を変えています。現在、伝統エイサーとされているものも、ある意味では創作的な側面が強いわけです。特に1950年代半ばからエイサーコンクールが中部の石川市やコザ市で始まったことで、様々な点で大きな変化が

ありました。

エイサーも元は念仏踊りということでその宗教性について触れられておりますが、コンクール以降のエイサーは、念仏の歌詞を少ししか歌わなくなったので、今は踊り手も地謡も、エイサーの宗教性と言われてもほとんど認識してないのではないかと思います。

ここで創作エイサーと言われているのは、いわゆる地域の青年会に基づかない任意の団体で、私はかつて「クラブチーム型」と呼んだことがあります。1982年に琉球國祭り太鼓が創設されて以降の諸団体を言っています。ある意味では歴史的にこの二つの概念を捉える必要があると思います。1980年代以降の創作エイサーが、国内や海外の各地に支部組織を作って、支部と本部のネットワークで活動して、世界のウチナーンチュ大会のような大きなイベントでは合同で演舞するというような性格を持ってきていますので、創作エイサーというものも歴史的に捉える必要があると思います。八巻さんの言われている事は海外で活動されている方の視点として非常に大事な事を含んでいますが、沖縄の中で創作エイサーと伝統エイサーをあまりにも固定的な見方で捉えると、危ないことも色々あるということは一言申し上げておきたいと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。創作エイサーと伝統エイサーにも色々議論もあるかと思いますが、留意が必要だというご指摘でした。

それでは、第2回会議以降に、より議論を深めていく準備をしていくという事で、上里副委員長等を中心として検討会を構成してもらっています。その報告をお願いいたします。

【事務局】

資料3 説明（省略）

<補足説明>

3ページ2. ③・「しまくとうばや沖縄空手も重要ではあるが～」についてですが、「しまくとうばや沖縄空手などと共に、沖縄の歴史・文化を体系的に学ぶ機会というのを提供するということも取り組んでいく必要があるのではないか」という趣旨のご意見でした。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。取りまとめ資料等ご覧いただいたかと思いますが、上里副委員長、いのうえ委員、小渡委員がそれぞれ検討会に参加して下さっております。他に追加したいことなどあればご意見を願いたいと思います。

【上里委員】

私は県立芸大の神谷先生と一緒に議論をしました。神谷先生が、行政にいた立場からのご発言で、行政の役割というのは非常に重要だが、行政のルールに阻まれてなかなか自らの力を発揮できない、とことを常におっしゃっていました。その問題点、課題を今回の経緯として、どうやってルールを変えていくか。ルールを変えて、現場の人たちが「水を得た魚」のようにしっかりと活躍できるような環境を整えていくか、ということが大事だということ、聞いていて思いました。

学校については、特に教材に関して、現場の先生方をサポートするために大枠として教材を作り、その後に各市町村がどうやってこれを効果的に運用するかという、運用の方法・展望についても神谷先生はおっしゃっていました。

観光についても、基本のコンテンツだけではなくて、琉球歴史文化においてまだ眠っている様々で膨大なポテンシャルを、先を見据えて掘り起こしていく、そこも視野に入れていく必要があるのではないかという話があり

ました。

もう一つは、今回何度もお話しはしていますが、やはりこうした歴史文化を体感もしくは見せるような場が必要だというところが、今回県の施策として具体的な案として出すものだと考えております。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。いのうえ委員、いかがですか。

【いのうえ委員】

学校との連携、教材については少し違う事例になりますが、例えば沖縄戦の学習について、南城市では市史戦争編を活用して、平和学習を担当している教員と、市史編纂の担当者が一緒にワークショップをやって、どういう教材が必要かということ話し合う取組があります。この仕組みは、ほかの文化や歴史分野でも活用できる枠組みだと思いますので、こういった事例も参考にしながら進められるといいかなと思います。

本会議では教育分野の話がよく出ますが、教育部局が参加してくれないと実効性がある取組にならないのではないかと思います。今日は県の関連部局は、文化振興課とものづくり振興課が参加されているということですが、その辺はご検討いただければと思います。

伝統工芸と観光の連携について、3ポツ目「伝統工芸を県内企業にぜひ取り入れて欲しい」という話を私もしましたが、域内経済循環ももちろん大事ですが、それ以上に地元の人が地元の文化を誇りに思うシビックプライドの醸成が大事だと思いますので、その視点も是非加えていただければと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。それでは小渡委員、お願いいたします。

【小渡委員】

検討会の議論全体に関連する、「故郷に自信を持つ」という点についてですが、これは沖縄県から出ないと分からないものだと思います。色んな教材で学ぶよりも、一度海外に行って「沖縄ってどんなところなの？」と聞かれて答えられない自分を知ったり、海外の文化に触れて「なるほど、沖縄ってこんなにニッチなんだ」と感じるような、そういう体験をしないと絶対わからないと思います。そういう経験の中で、自分の文化の素晴らしさや尊さを理解したり、継承していかないといけないという思いが出てくるのではないのでしょうか。このような機会は予算の関係上、すべての人に提供できないと思います。それなら例えば、県民と世界の人々をwebで繋いで交流をさせている民間企業を活用して、言語だけでなく、沖縄の文化や歴史を発表して相互に学ばせるなど、簡単にできる仕組みがあるので、これまでの常識にとらわれないで、今できる工夫やツールなどを活用していくのは、デジタル活用に繋がってくるので重要です。自分の良さを知ってということ、やっぱり対比をしないとわからないということでもあるので、これはぜひポイントとして重要だと思います。

学び方については、インターナショナルスクールだと「プロジェクトベースドラーニング（問題解決型学習）」という形で学びを深めていきます。低学年から、一つのテーマに対して自らで調べるように授業をします。必ずしもこちらが素晴らしい教材をセットしてあげなくても、インターネットやSNSなど調べるツールはたくさんありますし、これらを活用して調べるのは大人よりも子どもが上手いです。大人の観点で、我々が素晴らしい何かを準備しなくちゃいけないというのは違うと思っています。入口はどこでもいいですが、

例えば紅型から学びをスタートさせて、琉球の歴史をもっと深く知っていく為に、プロジェクトベースで学ばせることもありなのではと思います。また、調べたものを発表する場を地域や学校で作ってあげることが必要だと感じています。

工芸については、工芸の人材像というのが必要だと考えています。いわゆる雇われ職人や小さい工房などは、月収10万円程度のところも多いです。この状況を見て、自分も職人になりたいと思う人はなかなかいません。それでは、どういうふうに移ぐ力を付けていくかということ、コンソーシアムなどで検討しているところです。例えば50年後100年後、工芸の人材ってというのはどのような人材像であるべきかをディスカッションしながら決めていくのは、一つのアプローチだと思います。100年後に染だけをやっている紅型職人が生き残っていられるかということ、それはごくごく僅かかなと私は考えています。例えば、工房の収入の1/3はデザインや資材で稼ぐ、1/3はツーリズムとしてお客さんを受け入れて説明する事で稼ぐ、その一部を自分の創作活動に充てるなど、こういった人材像をきちんと決めて、こういうふうにはやっていかなきゃ逆に食っていけないよ、ということを知らないといけないと思います。高齢者の知見を含めてデータとして残していく必要があると思いますが、文化や工芸や技術の伝承などに関しても、その先の社会の展望を見せながら、こういうふうな人材を作っていかなないと、結果として残念な結果で終わってしまうかもしれません。そこも含めて検討しないと、絵に描いた餅で実効性がないものになってしまうのではないのでしょうか。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。御三名の方々の追加の提案や説明などお聞きいただい

たことについては、事務局の準備した提言骨子（案）等々に反映できるように、のちの議論の中でご発言いただきたいと思います。

4. 議 論

【事務局】

資料4 説明（省略）

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。今日の会議の主要な部分はこれからの議論にあるわけでございます。この骨子（案）をどう作り上げていくかということで、とりあえず事務局案を提示していただきました。もちろん昨年度からの議論が反映されているわけですが、皆さんから疑問、修正、追加等々をお出しいただきたいと思います。この資料4別紙の「具体的な例」という欄を見ると、これとこれはむしろくっつけて事業として取り組んだほうがいい、というものもあるかもしれません。この前話したことが反映されていないという事もきっとあるかと思えます。どうぞご意見をお願いいたします。

【久万田委員】

事例に関して、例えば（2）③「世界のウチナンチュネットワークの活用」では、先ほどのシカゴ沖縄県人会の取組が書かれています。例えば以前、沖縄県文化振興会で「世界エイサー大会」をやっていました。コロナの影響で現在はできておらず、今年は復帰50周年と重なっているので復活するかと思っておりましたが、なかなかそういう声なかったようです。この事例もある意味では、世界のウチナンチュだけではなく、例えばインドネシアとか中国とか台湾とかの創作エイサーチームも招いて結構がんばってやりましたが、尻すぼみになるのは非常にもったいな

いと思っています。予算の問題とかありますが、ハワイでもエイサー大会をやっているの、そういうものとリンクしたりして、新たな展開を模索すべきではないかと考えます。

それから（４）①「県と市町村、関係機関等との連携体制の構築」というところで、私関わった事例で言うと、沖縄県文化協会「特選沖縄の伝統芸能」という公演をしています。離島も含めた県内の市町村に、出演可能な団体の推薦を依頼して、各ブロックから推薦された団体からさらにセレクトして、国立劇場で上演することを続けています。前はなかなか各市町村からの推薦が無かったので、最近はやっぱり国立劇場の舞台に出ると地元もやる気が出る、ということもだんだん浸透してきて、たくさん推薦が出るようになりました。既に行われていて今後も上手く繋げられるいい事例だと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。大田委員どうぞ。

【大田委員】

（１）②「多様な離島文化を活用した地域活性化」とありますが、私は最初から先島に専門学校や大学を作ってほしいという要望をしています、この中に全然反映されていないのは何故だろうという疑問があります。

それから、（１）①「地域文化を担う人材の育成・確保」と、（４）①「市町村・関係機関等との連携強化」がありますが、沖縄県文化振興会の手続きの仕方が非常に複雑で、離島の人達が申し込もうとしてもなかなか難しいのでどうにかしてほしいと思います。

（４）④「多様な財源の確保」や、⑤「文化活動を支える企業等を支援する取組」に関わってくるとは思います、市町村の文化財関係者などを県に派遣したり、予算の取り方と

かメセナからの支援の受け方などの方法を研修するなどしてほしいです。離島には専門家がないわけですから大変難しいんですよ。だからこれを実現するためにどうするかというのを検討していただきたいと思います。

それから教育に関しても、教育はいつも先生達が忙しい事もあり、歴史に本腰を入れて勉強するという事はなかなか難しいですよ。これは教育委員会がもっと本腰を入れてやってほしいなと思います。

骨子案では、琉球王国の体制下で洗練された芸術性というのが書かれていますが、石垣は洗練された芸術性というよりも、むしろ生活の必要性から出てきたものだというふうに感じます。そういうものを育成するためにも、やっぱり学校が必要じゃないかな。琉球ルネサンスのビジョンというわけですから、ぜひ先島に大学か専門学校を作ること、琉球文化ルネサンスの目玉にしていきたいと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。山里委員どうぞ。

【山里委員】

私も大田委員の意見に非常に賛成します。

その上で付け加えたいことがあります。私は議論の最初から「一体ルネサンスってなんですか？」ってずっと問うてきていますが、骨子案にはこれがはっきりと見えないですね。ルネサンスとは、ただ文化が活性化すればいいのか、あるいは文化観光が盛り上がればいいのか。そういう意味ではなくて、ルネサンスには非常に大きい精神的な、あるいは意識の核心といますか、深い変化といますか、そういうものがまずあるべきだと思います。つまり、沖縄文化、琉球文化に対する見方が、新しい見方になっていき、人々が自分の文

化を見直す、そこから新しい創造が始まるというのが本来の私が見てきた、例えばヨーロッパ諸国でのルネサンスのあり方だと思うんですね。じゃあ我々は一体どういうものを基礎にして、ルネサンスと言っているのか。何をどういう物語で、どういうビジョンでもってルネサンスを議論しているのか、ということ、提言のまず最初の方に入れないといけないと思います。その辺りをしっかりと議論していただきたいです。

それから2点目は、小渡委員から「ほかの文化と触れる事で、自分たちの文化をしっかりと見ることができる」とご意見があり、これもその通りだと思います。一方で、見なくても元気な文化があります。アメリカがそうですね。なぜアメリカ文化は元気なのか、それは「自分たちは世界の最先端」という教育をずいぶんなされているし、実際に最先端のものを生み出しているわけです。日本の音楽、ラップなども、日本の現代文化というのはアメリカからの影響をものすごく受けている。自分たちの中で何か新しいものを生み出していくことが非常に大事じゃないかなと思います。私の孫はまだ小学生ですが、見ているともうすでに沖縄の文化、琉球の文化から離れて、どこかからきた文化で頭がいっぱいなんですね。これはほとんどの子ども達がそうだと思います。ただ言っているだけではだめで、若い人が魅力を感じるようなものを私たちは作らないといけないだろうし、それはここにいる委員や県の皆様のビジョンだけでは足りないだろうと思います。なので、例えば若者の意見を聞いてみるなどして、何が一体魅力的なのか、どういうものを作れば魅力を感じてくれるのかという事を、もうちょっと確かめたいと感じています。

それから3点目です。「離島」あるいは「離島文化」という言葉がずっと使われていますが、では離島といった場合、どこが中心かと

いうとたぶん沖縄島が中心になっていると思います。私は最初から「沖縄島中心にならないようにするのがルネサンスだ」とずっと言ってきました。琉球諸島が全体で盛り上がらないと、これはルネサンスになりません。それも前回発言したと思いますが、「離島」という言葉を使わないで「琉球の島々」とかそういう言葉を使って全体で盛り上がっていきましょう、ルネサンス＝新生・再生というものを目指しましょう、ということが大事じゃないかと感じています。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。どうぞ遠慮なさらずに、こんなことを感じた、新たに考えたことでもよろしいと思います。嘉数委員どうぞ。

【嘉数委員】

山里委員の話に続いてですが、やっぱり琉球文化ルネサンスというのは単純に自分の沖縄、自分の地域に誇りを持つ状況を目指すところであり、また、その文化に携わっている人達が誇りを持って、しっかりと力を発揮できる環境を整えていくことを目指していくべき姿かなというふうに改めて感じています。その中でも今回、「地域文化の継承」という考え方は、とても素敵なことだと思います。

それと合わせて、どのようにそれがうまく回っていくのかという取組づくりが、改めて重要なのかなとも感じています。市町村、関係機関との連携等、行政と教育現場と文化をどのように繋いでいくかが、とても大きな今後のポイントになってくるのではないかと思います。そういった時に、改めて文化に携わっている方々をもっと取り込んでできる環境づくりをこれまでなかなかできなかったことかもしれませんが、そういうことを作り上げていくという姿勢構築も一つ可能ではないか

など正直思っています。

もう少し具体的に言うと、すべて現役の教員や公務員の方々に担ってほしいということではなくて、プロデュース人材の育成・確保ということも出ていましたが、例えば県立芸大を卒業した学生達が、各市町村や各学校現場に専門員としている。各劇場、施設、県内の公的施設に存在する。それと併せてもちろん大切なのは公的機関だけではなくて、理想的には前回もお話があったように、各企業にそういった文化の専門職がいることができれば、いわゆる文化を担う方々が生計をしっかりと立てながら、そして自分の力を発揮できる仕事の確立をしていくということが、まさに沖縄ならではの一つの取組姿勢ということにもなり得るのではないのでしょうか。また、そういう専門職が各現場にいることによって、お互いの情報共有もできるようになります。どのように予算を取り立てていくかというのは、一番上で県が取りまとめをしていただいて、文化の専門職の方々に情報を流し、その方々が地元で活躍している方々に、「補助金が出るんだ」「予算があるんだ」「そういうところにはこういうやり方でこういうふうにやっけていくんですよ」ということをしっかり降ろしていったら、皆さんの活動が潤うような環境づくり、仕組みというのができていけば、沖縄らしい文化が非常に輝き、誇りを持てる。皆さんが情熱だけではなくて、そこにしっかりとした基盤が作られた上で活動ができる体制づくりも今後、沖縄の文化にとっては全体的に必要なことだと感じました。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。小渡委員お願いします。

【小渡委員】

6点ありまして、まず(2)①『琉球歴

史・文化の日』を中心とした普及・啓発の取組強化」では、何か記念日を制定して満足してはだめで、何をするかというところが一番重要だと思います。私の個人的な経験でも、2019年に「琉球紅型の日」を制定しましたが、ただ制定すると、毎年何かをやらなきゃいけないというプレッシャーが結構あります。今年は企業が選んだ紅型の作品で、その企業の商品化をするというプロジェクトを8社分走らせていて、企業が採用した紅型デザインの商品の報告をしました。何をするかというところの作り込みっていうのは、すごく重要なと思います。

2点目に、(2)③「世界ウチナーンチュネットワークの活用」では、何年に1度とかっていう話ではなく、普段から交流をしたらいいと思います。コロナ流行を経て、海外とのビジネスミーティングが簡単にできるようになりました。世界のウチナーンチュの皆さんは、各地元で成功されている方々も多く、おそらく資金的にも裕福でしょうし、各地域における影響力だったり、経験だったりとかすごく学ぶポイントが多いと思うので、これはもっと活用しないともったいないです。こういった取組を事業者に請け負ってもらい、月1や週1で、南米やアメリカ、アジア、ヨーロッパで活躍をしているウチナーンチュに触れるというのが、おそらく小中高校生にとってすごく貴重な体験になるのではと思っています。

3点目に(3)①「宿泊施設、飲食店等での伝統工芸品の活用促進」については、福井県鯖江市という、伝統工芸が集積している場所に視察に行ったことがあります。ここでは漆器工房が観光コンテンツを提供できるように、リノベーションをする費用を県の補助金で払っていました。工房というのは染も織も漆器もおそらくそうだと思いますが、なかなか観光客が5～7人訪れて観光するような場

所じゃないです。仕事場なのでそもそも人に見せる用に作られていません。ここに「もっと観光需要取り込むから、あんた達頑張りなさい」と言うだけでは、誰も何もできません。なので、もし可能であれば、そういった観光化、6次産業化を施行するのであれば、どういふふうに観光化するのも含めて、事業として支援をしてもらわないと結局できません。福井県、石川県などは工芸の職人さんのリノベーション費まで、県や地域が応援してくれているという実例があると思います。

4点目に(4)②「プロデュース人材の育成・確保」で、4年前ぐらいに経産省でやっているデザイン系などの地域プロデューサー育成事業がありました。経産省でいくつか事業をやっていると思うので、そういったものを調べてみたらどうでしょうか。

あと5点目の(4)③「デジタル技術の活用」で、今は「具体的な例」がすごくわかりにくい文章になっている印象を受けます。デジタル活用は様々なポイントで活用できると思います。先ほどの国際交流もそうですし、楽しむコンテンツを観光客向けに提供するというのもそうですし、デジタルアーカイブという形で芸能や工芸、しまくとぅば、空手をよりクローズアップした動画を撮るとか、3D撮影やモーションキャプチャーなど様々な技術がありますので、これを学ぶ、楽しむ、継承する、見せるなど様々なアングルで活用していくように、明確に変えたほうがいいと思いました。

最後6点目で(4)⑤「文化活動を支える企業等を支援する取組」で、新聞社では芸能活動されている方を社員に抱えていたりいますが、そういうのがもっと色々な会社で広がって行って、工芸職人や伝統工芸に関わっている方々で何かしらの講演が定期的にあたりしますが、そういったものに配慮している企業とかを認証してあげたり、奨学金の事例

もあります。そういった賃金補助を県がするとかですね。そうするともっと沖縄県の会社としても、沖縄の文化を大事にしている人材を雇用して、かつ県もそういった企業に対して、賃金3千円なり、5千円なり補助をするといったような、わかりやすいものを行ったほうが、実際にアクションを起こす企業も増えてくるのかなと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。いのうえ委員、よろしくお願いいたします。

【いのうえ委員】

上里委員に聞きたいのですが、(3)③『ホンモノ』を体感する場の創出」で、具体的な文言として何を盛り込むべきでしょうか。

【上里委員】

私の構想では、琉球文化に特化した迎賓館的なもので、MICE などにも対応できる施設を新たに作るということ視野に入れていたんですが、現実目下としてはおそらく文化財をどのように活用していくかというところに落ち着いていくのかなと思っています。特に最近では中城御殿や御茶屋御殿の復元の話がありますが、復元後にどうやって活用していくかというところが、「体感する場の創出」に繋がっていくと思います。ただ問題としては、文化庁は文化財をどうやって活用していくかという方向に変わってきてつつありますが、文化財という性格上、どうしても規制があり、この規制をどうやって乗り越えていくか、県として使いやすい形を色々とサポートしていくかということであれば、現実的な活用方法になるのかなと思っています。首里城公園にしても火災前は結構規制が厳しくて、例えばケータリングを御庭でやることもダメという話でした。ただ、最近では首里城の MICE を

積極的に推進していきたいということで、首里城公園自体も活用の方向に変わってきているので、そういうことも含めた上で、例えば、県内にある文化財とか、歴史的な施設をもちろんちゃんと守るギリギリの最低限のことはしつつも、どうやって活用していくかという方向、それに対して県がそこに向けていくような施策を行うかというのが提言書に書くべきものなのかなと思っています。

【波照間委員長】

いのうえ委員、ほかにはございますか。

【いのうえ委員】

検討会の時に申し上げた事を色々盛り込んでいただいているので大丈夫です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。

【山里委員】

私は全体的なことについてちょっと話をしたいです。中間報告の骨子を読んでいますと、伝統の継承にちょっと傾斜している感じがするんですね。伝統を継承するという内容は素晴らしい事です。これがないと文化がぐらぐらしてきますので、これは是非進めないといけないんですが、それと同時に、その伝統をどういうふうに、何を新しく創造していくか、ということが、ルネサンスの一番の肝心な意義だと思いますので、そこも強調したほうがよいかなと感じました。新しい文化創造のために支援をすると少し書かれています、県の財政的、精神的な支援であるとか、あるいは各地域、市町村のコミュニティの支援などが必要じゃないかという感じがします。

それから世界のウチナーンチュについては、沖縄から人々が移動して、拡散して、世界に住んでいる、という一つの大きい沖縄のネッ

トワークです。その人達はそこで異文化と接触して、新しいものを作っていきますが、それでもやはり琉球文化、沖縄文化を持っています。だから変わるものと変わらないものは、この人達を見ているとわかります。変わらないものが、ここで言っている本質的なものかもしれません。例えばハワイで近いうちに文学作品のアンソロジーが出版されますが、その中に沖縄の芸能を盛り込んだオペラみたいな作品が作られています。それは沖縄のエイサーや、組踊風なものや、琉球音楽や、舞踊などを全部一緒くたにして、同時に新しいハワイ的な、アメリカ的なものを盛り込んだ大変斬新な作品ができています。

おそらく文化の本質というのはガチガチに固まっていて変わらないものではなく、変わりながら何か新しいものを作っていくというのが文化だと思います。文化は私達の日常生活様式の総体を意味します。文化は、実際に私達が日常的に生活する部分と、先ほど上里委員がおっしゃった迎賓館にあるようなものの二つの層があります。迎賓館に置くものは私達の生活＝文化の中から出てきた上澄みの部分ですね。普通に「文化」と言っているのは、この上澄みの、純化されたレベルの技術品や教養のレベルを念頭においているはず。そして、これが私の言っている、想像され、変わっていく部分です。そういう変わるものと変わらないものを認識しながら、同時に世界に広がっていく大きいコミュニティが有する沖縄・琉球文化の在り方を考えると、大きい枠組みも想定して議論したほうがいいのかという気がします。

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。それでは久万田委員、お願いします。

【久万田委員】

(4) ②「プロデュース人材の育成・確保」
と言うと、沖縄県文化振興会の事業で、7、8年くらい前に「アーツマネージャー育成事業」というものをしておりました。これは一括交付金を利用したものだったと思いますが、県内のホール関係者を県外のユニークな活動をしている施設に何ヶ月か派遣して研修させるという、非常に意欲的な試みだったと思います。ただ、その後、成果の検証とかがいまいちよくわかりません。舞台関係者やホール関係者のスキルアップに随分貢献した事業だと思うので、あれをもう一度掘り起こすというか、もうちょっと未来に繋げられるのではないかと思います。

それと前にも話が出たと思いますが、修学旅行生にどう沖縄文化を体験させるかという話があんまり出てこないなと思いました。日本の修学旅行というのは、ある意味で沖縄という土地の風土、歴史、文化を体系的に教える絶好の機会だと思います。例えば、私も立ち上げに協力した沖縄市のエイサー会館では、二階の展示でAR（拡張現実）を活用し、画面を見ながら自分がエイサーをあたかも一緒になって踊っているように体感できるようなシステムがあります。そういうものを修学旅行生とか沖縄の子どもたちにも提供するというのを考えてみるといいと思います。体系図では(3) ③「『ホンモノ』を体感する場の創出」に該当するか、あるいは(2) ②「学校教育と連携した普及・啓発の促進」に修学旅行が入るのか、と考えています。

最後にたいへん大雑把な素人発言で申し訳ないですが、例えばラオスあたりでは高校生の女の子は制服として伝統的な「シン」という巻きスカートを履いています。これは公立学校の生徒だと思います。また公務員も、女性職員はみんなこの「シン」を着用しています。沖縄だったら、例えば伝統的な紺とか紅

型に該当するかと思います。今、かりゆしウェアはすごく普及していますが、結構紅型風のまがい物が多い気がします。もっとも本物の紅型を雨の日などに着るのはどうなのかという問題もありますが。紺とかそういうものは公務員などにある程度義務化するようなことはできないのかなと考えました。非常に素人的な発言ですが、そういうやり方もあるんじゃないかなと思いました。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。一通り、委員の皆様のご意見を頂戴したかと思います。色々細かなことも含めて、新たな提案があったかと思います。このあたりの事柄については事務局の方でこれから骨子に基づいた提言書の作成にかかっていくはずですので、そこで今日の各委員からの発言を是非反映していただきたいと思います。

私個人も議長の席ではなくて一人の委員として、思っていることを申し上げます。やはり観光の質の問題、その質を支える人材を沖縄県内の我々が担わなきゃいけない。これはとりもなおさず、観光に携わる人たちが沖縄の文化に対してより深く理解し、知っている、そして愛着を持っているということがないと、外からやってくる人たちが沖縄の文化に感動するはずはないんですよ。これは言うまでもない事だと思います。そういう意味で、観光に携わる人、そしてそれ以外の人も深く沖縄の文化を理解する、そしてそれを観光客に伝えなくてはなりません。これは、私が沖縄県立芸術大学芸術文化研究所の時代に色々企画しました。「観光案内士のライセンス制を作りましょう」であるとか、あるいは経済的に豊かな観光客を取り込んで、沖縄の芸術文化を体感し、技術を習得する「うむさうちなー」（面白いね、沖縄）というような企画を考えました。そういった新しい今後の観光の中で、

これまでのようにただ見てもらうだけでなく、実際に経験し、自ら沖縄の何かを作り出していきやり方を考えていました。ガラス工場に行って自分の吹きグラスを作るとか、その類のものはもうなされていますが、それよりもっとしっかりとしたものを芸大なり、各工房なりで学ぶ。それも1日や2日ではありません。しっかりと学ぶためには単位制にして、毎年毎年帰ってきてもらい、しっかりと技術を身に付けていく。そのような事を確か企画したことがありました。

おそらく今後、沖縄の観光がより魅力あるものになるためには、このようないわゆる富裕層、あるいは沖縄の文化に本当に愛着を持っている人たちを大切にする観光も目指されるべきだろうと思います。

それと、世界のウチナーンチュウの話題が何度も出てきておりますが、先日、新聞で「世界ウチナーンチュウセンターの万国津梁の新拠点をつくろう」という広告があり、新しい万国津梁の拠点をぜひ沖縄に作ろうではないかという声もあります。そういう意味では世界のウチナーンチュウ大会が新しくより魅力あるもの、そして確固としたものになるためには、社会で出ている声を敏感に感受して、それを県の政策に取り入れていただくことが非常に重要だと思います。すでに「万国津梁」の名前を我々の会議に名付けているわけですから、そのような動きを決して無視することのないようにしていただきたいです。提言（骨子案）にも、世界のウチナーンチュウという文言が何度も出てきております。そういう意味で、魅力のある世界のウチナーンチュウの拠点たる沖縄を作らなくてはいけないだろうと私は思っておりますので、あえてこの場を借りて申し上げておきます。

さて、それでは次に進みますが、事務局で提案書素案をこれから作成し、次回の第4回会議にて議論する予定です。そこで、提言書

を取りまとめに向けた考え方について、ご意見を頂戴したいと思います。

【事務局】

資料4 6ページ 説明（省略）

次回、資料5のフレームワークの例示というかたちで、お示しできればと考えておりますので、残り時間は少ないですが、まだ議論足りないところをご意見いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

【波照間委員長】

それでは資料に基づきながら皆さんからご提案いただきたいと思います。先ほどの議論で、ある程度お話が出ていますので、新たにご意見や、プロデュース人材の育成、世界のウチナーネットワークの活用、琉球文化ルネサンスを体現する場の創出などについてご意見があればお願いします。琉球文化ルネサンスを体現する場の創出については、先ほど山里委員から、若い人達が沖縄の何に魅力を感じているのか、これからの人たちは何を作り出そうとしているのか、そういったことを聞く場が必要じゃないかという、提言がございました。これらの事柄について皆さんから、どうしてもこれは提言の中に入れてほしいということがあればお願いします。久万田委員どうぞ。

【久万田委員】

「美ら島おきなわ文化祭2022」では、各市町村の文化活動を一覧表化して、他県に対して示せるような形にパンフレット化した事は、私は最大の意義だと思っていて、今後はこういうやり方すべきだと思います。沖縄の中で、音楽・演劇・舞踊・食文化・美術工芸・空手・文化一般の様々なイベントとか催しものをまとめていることは、次に国民文化祭がくるのは47年後でしょうから、その機会を待

っだけではなく、常にこういうふうの外に向けて体系的に示す方法をやることは非常に良い体験になったと思います。やはり新しいイベントを作るのではなく、今あるイベントをどう組織化して体系的に外部の人に示すかということに対して、非常に貴重な経験になったと思うので、これから琉球ルネサンスの面でも学ぶことは非常に多いのではないかと考えます。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。山里委員も、確かこれに関わった部分ございましたよね。ちょっとご経験を。

【山里委員】

私は宮古島に行って、現代詩の講演をしてきましたが、やはり先ほども申し上げましたけども、上からの目ではなくて、文化を享受する、これから作り出す人達の事情というのが大事なという感じがします。

ちょっとだけ話変わりますけども、先ほどから久万田委員がおっしゃっている芸能祭については、私もとても賛成です。なので世界のウチナーンチュ大会をやるときに、世界のウチナーンチュ芸能大会をやったらどうかなと思っています。音楽団やエイサー大会、舞踊とかですね。これをする事で、世界の大きな琉球・沖縄ネットワークの中で、どういうことが行われているか、どういう伝統からどういう創造的な文化が生まれているかがすぐわかるし、「あ、こういうところが我々の中から生まれるんだ」と感じることができます。例えば YouTube のフォロワーが 60 万人もいる県系ブラジル 3 世のギタリストがいたりします。沖縄の文化の中で生まれてきた人達を見ながら、世界のウチナーンチュ大会と一緒にやってみると、ものすごく盛り上がって沖縄文化の創造性がわかるのではと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。上里委員どうぞ。

【上里委員】

資料 4 の p6 にある「4. 琉球文化ルネサンスを体現する場の創出」2 点目「～生活に根付いた「地域文化」を体感するために必要なものとは。」に関して、先ほど施設の話をしました。各、各地域でどのような場を創出するかという点で、たぶんヒントになるのがエコミュージアムという考えだと思っています。実は南城市がもうすでにそのエコミュージアムによるまちづくりということで計画を策定しています。今がどういう進捗かはわからないんですけども。つまり、地域全体が博物館で、地域の自然とか文化とか生活様式そのものを見せていくというような考え方で、南城市は色々動いています。沖縄全体で地域の活性化の場をつくるためには、エコミュージアムという視点を共有していくのが必要なかなと思いました。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。いかがでしょうか。大田委員どうぞ。

【大田委員】

私は一言でいうと、先島に大学か専門学校をつくっていただきたいということと、もう一つは、これに書かれているのかわからないですが、文化の基礎となる素材、例えば材木とかを植樹しないと間に合わないのではないかと考えています。例えばこの前、国頭でイヌマキを植えていましたが、それがきちんと採れるようになるのが 100 年ぐらいだとお聞きしました。石垣では害虫被害があって、たくさん植えてあったイヌマキがほとんど枯れ

てしまって、採れる木がない状態です。石垣の仁王像の木材であるオガタマノキもほとんどないです。木の幹は大きいのですが、どうしてか芽が小さくてなかなか発芽しないという問題があります。だから、将来の沖縄の文化を支えていく木材とかの色々な素材は、きちんと残していくように、今から 100 年後、200 年後を見越した事をやっつけていかないとだめじゃないかなという気がします。それと食材にしても、石垣で食べられている植物も、草みたいなもので、ちょっと味を付けてやってきたような料理ですが、そういうものはほとんど農薬でやられてもうないんです。そして、祭祀に使うツノマタが、地球温暖化で今年は採れなくて、今年は神様に供える海藻は、別のものを入れていました。やっぱり食文化というのは、ものすごく色々な付加価値を付けて広がっていると思うんですけれども、将来に向けて基本にあるものはできるだけ集めて、栽培していただきたいと思っています。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。大田委員のご発言の中で、色々な工芸や建築材に関わる沖縄の材木を 100 年後、200 年後を見越して植林事業を行うべきであるというご意見に、私は大賛成です。今回、首里城の主要木材としてオキナワウラジロガシを使う、使わないの議論があったわけですが、私が思っていた事は、巨木を切り倒すことそのものが目的ではなく、1、2 本切らせてもらうけれども、実はそれと並行して行うべきは植林事業である。それこそ 100 年後、200 年後には沖縄の国頭の山から採れたオキナワウラジロガシ、イヌマキなどの木で首里城が復元される。それこそ本当のかつての首里城だろうというふうに思っておりました。そういう意味で、「沖縄県が目指すべきは植林だ」ということは間違いない事だと思っています。「自然は文化か」

とここで議論するものかどうか問題かもしれませんが、植林事業は人間がする文化的事業です。ですから、私は大賛成です。県民が一人ひとりやんぼるの山に入って 1 本ずつ植えれば素晴らしい山ができるんです。そういうような事も是非考えていくと、100 年後が楽しみですよ。読谷村では、平田大一さん達が琉球の黒木を植える運動をしていらっしゃるんですよ。あれは元々、海邦銀行が始めた事業を彼らが拓げていっている、そういった性格のもんです。ですから本来、一企業がやっていた仕事が文化活動になっているんですね。そういう意味で色々な形で植林事業を文化事業として行うということも目指していただきたいと思います。

【小渡委員】

資料 4 の p6 にある「1. プロデュース人材の育成・確保」に関して、「アーティスト・イン・レジデンス」をご存じでしょうか。海外のアーティストが沖縄に来て、エイサー文化や工芸など文化を習ってもらい、アーティスト自信の創作の中で表現してもらおうという文化交流です。海外の人に自分達の文化を説明し、彼らがどう咀嚼して表現するか、またそれを持ち帰ってヨーロッパやアメリカでどう発信してくれるか。こういった取組もすごく面白いのかなと思います。

「2. 「美ら島おきなわ文化祭 2022」のレガシー」に関しては、是非データが欲しいです。やって終わりだと勿体ないと思うんです。どのイベントが盛り上がり、どういうイベントが盛り上がらなかったのか、なんでこれが盛り上がらなかったのか、場所が悪いのかコンテンツが悪いのか、どれくらい人が入ったのか、どれくらいお金が動いたのか、色々分析ができると思います。やって終わりよりは、そういったデータを是非いただきたいなと思いました。

「4. 琉球文化ルネサンスを体現する場の創出」に関して、「アートフェス」は盛り上がると思います。直島のアートフェスは世界の芸術好きの聖地になっていますが、ああいったものを沖縄でできるとすごくいいなと思っています。やんばるでもありますし、今ちょうど、うるま市の方で「シマダカラ芸術祭」がやっていますが、もうちょっと大きいアートフェスみたいなものができるといいなと思います。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。そろそろ予定の時間になりましたので、これで本日の会議を終了したいと思います。今日もたくさんのご意見をお出しいただきまして、ありがとうございました。事務局の方では、委員の方々から出た意見をしっかりと記録する、そして同じ考え方が別の言葉で話されているというような場合は、お互い寄せ合って一つのものにしていくというふうな、ちょっと困難な作業もあるかと思いますが、上手にまとめて素晴らしい提言書ができますようお願いしたいと思います。本日の議論については議事録がまた改めてまとめられて提出されるはずですので、そこで赤を入れるなり、あるいはここを言い忘れていたので追加する、というような事をなさっていただきたいと思います。

それではこれで私の出番は終わりにさせていただきます。事務局にお返しいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

5. 閉会・事務連絡

【事務局】

波照間委員長、委員の皆さま、本日は貴重なご意見いただきましてありがとうございました。先ほど委員長からもございましたけれども、本日色々な意見をいただきまして、取

りまとめに向けた作業をこれからやっていますが、議事録ができ次第、また個別に各委員の方々にご意見いただくこともあるかと思いますが、ご協力いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

次回については、我々の方で取りまとめた素案を提示していきたいと思っています。時期につきましては、令和5年1月の下旬から2月の上旬を予定しております。また、日程は早々に各委員の方にご都合を確認したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして令和4年度第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議を終了させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。